

第18回 ダイワハウスコンペティション 作品募集

笑う家

テーマ

家が笑うと、どんな暮らしが展開し、どんなかたちになるでしょうか。

笑うとひと言でいっても、それは実に多様です。楽しさや嬉しさから声を出して笑うこともあれば、微笑んで親愛の情を示すことや皮肉を込めて笑うこと、緊張から開放された時に笑うこともある。さらには、俳句の春の季語に「山笑う」とあるように、山の草木が一斉に芽吹き動物たちが動き始める、華やかな山の様子を表す言葉でもあります。そして、この感情表現は他者との関わりや、自分の置かれた環境の中で生まれます。自分が笑うだけでなく、誰かを笑わせたいという思いもあるし、共に笑い合う喜びもある。このような感情をもつのは人間しかありません。では、そんな人間特有の感情を家が表現したらどんなものになるか、それが今回のテーマです。

それは、現代の複雑な社会での日々の葛藤や緊張の中で、安らぎや喜びをもたらす家といえるかもしれないし、笑うことの本質であるユーモアを体現する家かもしれません。そして、誰かが笑えばつられて笑うように、家が笑うと、周囲の人びとやそれを取り巻く環境も笑うとも想像できます。しかし、笑うという瞬間を短絡的に設計してしまうと、逆に白けてしまう場合もある。家を設計することは、それを取り囲む状況を丁寧に読み解いてかたちにすることだとすると、ではどうやって家が笑うことを表現できるでしょうか。笑うということの多義的な意味や深さをとらえて、既存概念に囚われない、この先に一步踏み出せる家を具体的に考えてください。敷地は架空でもリアルでも自由です。戸建て1棟や、戸建ての集合、併用住宅、リノベーションなど、形式やプログラムは問いませんが、ひとつの家として必要な空間を提案してください。想像力を膨らませて、これからの可能性を押し広げる家を考えてください。

登録・作品提出締切

2023年
9月29日(金) 消印有効

| 審査委員 |

審査委員長

青木 淳

建築家 AS
東京藝術大学教授

審査委員

堀部 安嗣

建築家 堀部安嗣建築設計事務所
京都芸術大学大学院教授

平田 晃久

建築家 平田晃久建築設計事務所
京都大学教授

小堀 哲夫

建築家 小堀哲夫建築設計事務所
法政大学教授

八田 哲男

大和ハウス工業 執行役員

| 賞金 |

最優秀賞 (1点)
200万円 および記念品優秀賞 (2点)
各30万円 および記念品入選 (4点)
各10万円 および記念品
(以上、1次審査通過7作品)大和ハウス工業賞 (1点)
30万円 および記念品
(1次審査通過7作品より1作品選出)佳作 (10点)
各5万円
※すべて税込み

※大和ハウス工業賞は1次審査通過7作品の中から、公開2次審査のプレゼンテーションと質疑応答を通して、審査委員とは独立した形で大和ハウス工業が1作品選出する賞。最優秀賞、優秀賞、入選の中から選ばれるので、たとえば、最優秀賞がさらに大和ハウス工業賞に選ばれた場合、230万円の賞金が授与されます。

※2次審査のプレゼンテーション内容によっては、審査委員の判断で上記賞金額の配分を変える場合があります。

コンペについてのお問い合わせ

<https://www.daiwahouse.co.jp/compe/>

主催：大和ハウス工業株式会社

後援：株式会社新建築社



エコ・ファースト企業
環境大臣認定
We Build ECO
DaiwaHouse Group

「笑う家」を考える



座談風景。左から、八田氏、小堀氏、堀部氏、青木氏、平田氏。

リアリティと概念の両立

八田 今回で、ダイワハウスコンペティションは第18回を迎えます。前回はコロナ禍による行動制限がある中で、多くのエントリーをいただき、さまざまな提案に大変刺激を受けました。今年も多くの人に提案していただけるテーマを決めてコンペを活性化させていきたいと思っています。

司会 前回は、ますます深刻になる環境問題やウクライナ情勢を背景に、今まで当たり前だったものがなくなると、家はどうなるのか、という発想から「電気を使わない家」をテーマにしました。前回の審査を踏まえ、応募者にどのような提案を期待しますか。

平田 「電気を使わない家」では、何もかもが満たされている現代で、ある種の欠落が起こった時に、人間の本来もっている力を引き出される、建築としての新しいあり方が試されている家を見たいという気持ちがありました。提案の中には、そういった人間の潜在能力を引き出そうとする案もありましたが、その意図と方向性が一致しない提案も多かったです。今回は、テーマに対して建築のかたちにまで素直に反応してもらえるようなテーマにしたいと思っています。

堀部 私たちが建築を志す若い人や学生に、人間の可能性や希望のあるファンタジーを示した提案を求めると、彼らは今の現実の厳しさに向き合わざるを得ず、その閉塞感に参ってしまうのではないのでしょうか。だから、いきなり人間の可能性を見せてくれといわれても、困ってしまう。もう一度彼らに何を期待するのか考え直さないといけないと感じました。

小堀 家は人それぞれにリアリティがあるので、自分ごとにしやすい。だから、テーマとして「〇〇家」を続けた方がよいと思います。去年は、建築を前に進める概念的な広がりを見せる提案と、テーマに向き合って自分ごとにしている提案がファイナリストに残りました。しかし全体では、具体的に考えやすかったテーマだったはずが、考えを飛躍しきれない提案も多かったことも反省点です。

八田 「電気を使わない」というテーマは、これからの都市や社会、家や暮らしがどうなるのか、投げかけとなるテーマでした。実現できるようなリア

座談会参加

青木 淳 (建築家 AS 東京藝術大学教授)

堀部安嗣 (建築家 堀部安嗣建築設計事務所
京都芸術大学大学院教授)平田晃久 (建築家 平田晃久建築設計事務所
京都大学教授)小堀哲夫 (建築家 小堀哲夫建築設計事務所
法政大学教授)

八田哲男 (大和ハウス工業 執行役員)

リティがある提案にするのか、現実からは遠いけれど、これからは先立つ概念的な提案にするのか。どちらも応募者の中で考え方が振り切れていないように感じました。

小堀 リアリティと概念という話は面白い。私が家というものを考える時に、最初に浮かぶのは、家の匂いや記憶などの見えないものです。そういう図面には現れないたくさんものを包括した存在だと思っています。そういうものを今一度問いかけた時に、どのような提案が出てくるのか興味があります。

青木 このコンペでは、2次審査で模型の提出があります。これがこのコンペの性格をつくっていると思います。アイデアコンペなので、模型をつくらないと、思いつきぐらいのことで提案は出せません。けれども、模型があると足りない部分が明確に分かります。模型＝リアリティではないけれども、自分が考えたアイデアが、実際に空間として立ち上がったらどんなものになるのか、それを考える時間をもってもらうことに貢献していると思います。前回の応募者でも概念を強く押し出した案で面白いものもありましたが、模型ではそこに説得力が乏しいと感じたものがありました。リアリティと概念は、本来はどちらかに偏らず、両方がうまく成立してほしいですね。それでは何をテーマにするべきか、具体的な言葉にしてアイデアを出していきましょう。

見えないものを感じる人間の可能性

平田 人間は生物の中で唯一、言語を使う存在です。また、見えないものを想像したり、解釈を加えるのも人間の特徴です。身体的欲求を満たすためだけではなく、精神的欲求に応える家があったら面白いと思います。堀部さんが先ほど指摘された人間の可能性は、非常に過酷な状況でこそ現れると思います。どんなに過酷な状況であったとしても、ユーモアがないと人間は生きていけません。それも言語と同様に人間の特徴だといえると思うので、人間の可能性を考えるなら「笑いの家」をテーマに考えてみるのも面白いかもしれません。また最近では、「響き」に興味を惹かれます。響きは音が広がり伝わることや、ものに反響して聞こえる音を指します。一方で、まったく異な



大和ハウス工業株式会社

本社 大阪市北区梅田3丁目3番5号 〒530-8241
東京本社 東京都千代田区飯田橋3丁目13番1号 〒102-8112

www.daiwahouse.co.jp

るものなのに、ある色とある音とある感情に共通性としての響きを感じる「共感覚」も、人間の大きな特徴といえるかもしれません。認知考古学者のステイヴン・ミズンの説では、ネアンデルタール人は異なるフィールドの思考を重ね合わせて考えることができなかったのに、ホモ・サピエンスはそれができたため、進化の中で生き残ったという話もあります。



堀部 「住む」の語源は「澄む」だそうです。家の原点を考えると、外での活動で疲れた心を澄み渡らせ、心身を整える場所で、そこから住むという言葉が生まれている。これは、古今東西に共通した家の役割だと思えます。しかしコロナ禍を機に、在宅勤務が普及しました。新しい仕事のあり方だといわれていますが、ある批評家によると、家に会社や仕事もち込まれることで、家に侵食されてしまう危険性を指摘していました。寝ている時や風呂に入る時は、人は無防備な状態で心身をリセットしようとしています。その生まれ変わりの瞬間に、会社や仕事が入りすぐ隣にある、その現代の状況を改めて見直してみる、「澄む家」というテーマはどうでしょうか。

青木 最近、谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』（1939年、創元社）を再読しました。谷崎はこの本を通じて近代批判をしていて、近代の発展に際して失われたものを、街灯が普及して街が明るくなったことから「闇がなくなった」と表現しています。堀部さんが指摘された「仕事が家を侵食する」ということも近代化の結果といえるかもしれません。近代は視覚中心主義であると同時に、視覚できる人間が一番重要だという考え方でもあります。しかし、闇は視覚ではとらえられないものを指します。たとえば、記憶はイメージですから見えません。風のそよぎや匂いも見えない。見えないものは、近代とは異なる思想であり、人間の可能性を考えるうえでヒントになるかもしれません。それを土台にして考えてみると、たとえば「生きている家」というテーマはどうでしょうか。従来、家は人間が機能的で快適に暮らせることが理想だとされていますが、家自体が生き物として自分とは異なる人格をもつとどうなるか。写真家であり評論家でもあった多木浩二さんの著作に『生きられた家』（1976年、田畑書店）がありましたが、人間を中心とする近代の思想から離れ、人間の想像力の可能性を考えることはある種の原点回帰ともいえます。

堀部 ある社会学者の話では、ホモ・サピエンスのいちばんの特徴は、フィクションを構築したことだとあります。国家、お金、宗教などのフィクションを生み出すことができたことで、他の人類を圧倒したのです。平田さんや青木さんのおっしゃったように身体的な要求を満たすだけの家ではなく、現代

社会の当たり前を考え直す意味では、主体を人間から家に置き換えて考えてみるなど、あるフィクションを前提としたテーマを投げかけて、どんなことが実現するのか考えを巡らすのも面白いですね。問題はたくさんアイデアが生まれそうな言葉になっているかですね。

平田 より広義に人間というものをとらえないといけない時代だと思えます。人間の見直しと再評価が混じり合って思考することで、建築が前に進むと思えます。青木さんが先ほどおっしゃった、「家自体が生き物」という言葉は、人間が主体として個々が生きているというよりも、家が主体として皆が生きているともとらえられます。以前、設計した住宅を紹介する展覧会を開催した際、展覧会のタイトルは「Living in Creatures」(2011年)と名付けました。「Living」は英語で生きている、生活という意味があります。それと同様に生き物や創造されたという意味の「Creature」を掛け合わせた造語です。家は人間の手によってつくられているが、生き物でもある。そのような中間的な表現をしたくてこのタイトルにしました。つくられたものであるのに、生きている。使い方が異なるけれども、「Living」と「Creature」が英語で同じ意味をもつといことは面白く感じました。生きていて、動き出しそうな感じがする家。そういった切り口から考えを深めることもできますね。

八田 家が生きていると考えると、そこでの生き方にもさまざまなものが創造できるし、そこから成長することも考えていけます。応募者が想像力を膨らませて考えてもらえるテーマにしたいですね。

小堀 家での経験は、皆それぞれ独自のものをもっていると思いますが、他者との関係性を築く存在であることも大切だと思います。先ほど平田さんから「共感覚」という言葉も出ましたが、私も「共感」と「響き」は最近気になる事柄です。たとえば、自分のアイデアが自分から発生したのか、他人との会話の中で発生したのかと考えると、想像しないところで、波紋のように響き合って生まれているのだと思います。最初は自分ひとりの考えでも、他者が介入することの連続で響き合ったものに昇華していく。このような自分自身に向き合うことと、自分も含んだ他者がいて存在する世界を行き来するようなテーマはどうでしょうか。記憶は、自分の記憶だけではなく、誰かと共有できる共同的な記憶もあります。それも共鳴ですね。たとえば「私と私たちの家」というテーマだと、見えるものと見えないものが衝突しながら成立する家が想像できないでしょうか。

笑う家

堀部 今の若い人たちは、見えないものに怯えていると感じることがあります。新型コロナウイルスや戦争の危機に直面し、希望ある未来を想像できないのではないのでしょうか。だから、若い人たちが、見えないものに対峙して前向きにとらえられる提案ができることが重要だと思います。むしろ、テーマに向き合って、自分たちは怯えていますごく苦しんでいるということ、吐き出

してもらくくらいでもよいと思います。

平田 ほとんどの学生はコロナ禍によって、学生生活で得るはずだった経験や思い出を失ってしまった人が多いと思いますが、実は彼らにとってはそれが日常なので、苦しいと感じていないかもしれません。ただ、彼らが私たちと異なる時代背景を経験して育ったということは、同じ世界にいながらまったく違う日常を見ている可能性がある。彼らにとって、今の社会や暮らしはどんなもので何が課題なのか、そして希望はどこにあるのか、素直に問うたら面白いかもしれません。

青木 私が若い人たちと接すると、自分自身に縛られていると感じます。だから、先へ踏み出すのが怖くて、冒険ができないのではないのでしょうか。提案を通して一步を踏み出せるきっかけを掴めたらよいと思います。ものづくりには、自分が見たことがないものをつくりたいという欲求があります。それは歴史的に新しいものではなくて、その人にとって知らなかったことを、つくることで感じたいという欲求でもあると思います。そのような欲求を喚起するテーマにしていきたいです。冒頭で平田さんのおっしゃった「笑いの家」はそのような意味では面白く感じました。どんな家が想像できるでしょうね(笑)。

平田 僕は大阪出身なので、建築を笑いという概念から考えられたらと長年思い続けているのですが、実現できていません(笑)。もし、実現したら次世代の建築を見出せるかもしれません。

堀部 第14回の「太っ腹な家」はすごく印象的なテーマで、よい提案が集まったことを覚えています。このテーマは家が太っ腹になるわけだから、家を擬人化しています。先ほど青木さんが挙げた「生きている家」も家を擬人化していますね。今の季節、4～5月に山が一斉に芽吹くことを俳句の春の季語で「山笑う」と表現します。その季語に倣って「笑う家」とか、「家が笑う」とどんな姿なのか、考えるのは面白いかもしれません。

平田 たしかに、笑いというもののあり方を限定しない方がよいかもしれません。「笑っちゃう家」や「家笑う」というとまた違って聞こえてきますね。

青木 「山笑う」という言葉は、山が本当に笑っているわけではなくて、春になり若芽が出てきて、花が咲き始めると山が色とりどりになる。その様子を表したのでしょうね。同様に、家が笑うというのは、どんなものでしょうか。こちらも実際にわっはっはと笑っている家というよりも、もう少し広がりをもった笑いが生まれるのでしょうか。いろいろな可能性が考えられます。「生きている家」よりは「笑う家」の方が面白い気がします。

堀部 よい家を見ると、有名無名問わず自分自身がつい笑顔になっている感じがします。それは家が微笑んでいるように見えるのかもしれない。そこには大きな生命力も感じます。また、笑うと気持ちや体も澄んでいきます。感情が沈んでいる時に友人と会話していて、ふと「ここ笑うところだよ」なんていわれてつい笑ってしまうと、今まで落ち込んでいたことが「そうだよな、まあいいか」となる。そのように、人をデトックスする作用もあると思います。

八田 「笑う」という感情は、人間の大きな特徴ですよ。それは先ほど皆さんが共通して言及されていた「人間の可能性」のひとつです。自分の家に近くなると、ほっと口角が上がって笑顔になるように、笑うことは人の暮らしや社会には欠かせないものです。それを新しい家の提案において、どのように引き出すのかを考えられると面白いですね。

司会 それでは、第18回ダイワハウスコンペティションのテーマは「笑う家」にしたいと思います。

応募者に期待すること

平田 面白いと感じたから笑う、ということだけではなく、笑いにも多くの種類がありますよね。さらに笑いはひとりではなく、複数の会話の中や、誰かのアクションを見て起こる感情でもある。つまり、ひとりで成立するのはなく、他者との関わりの中で生まれるものです。そして、笑いには哲学や歴史があるように、人間の感情の中で最も深いものではないのでしょうか。私たちもこのテーマに応える提案を通して、新たな発見ができる期待があります。多様性があるテーマなので、応募者には固定観念に縛られず、考えてほしいです。

小堀 私はこの議論を通して、その固定観念に囚われていたと気がついたところですよ(笑)。笑いには、泣き笑いや怒りの時の笑いもあります。文化や思想が違うことによっても異なることと、誰にでも通じるところがあるので、海外からの応募や西と東でどう提案が変わるのかも楽しみです。また誰しも、自分が笑って得る喜びだけでなく、皆を笑わせたいという欲もあるものです。それは先ほど挙げた「自分と自分も含めた他人」がいることを意識させます。家が笑うということは、中にいる自分も笑いたいし、家の回りの人たちも笑わせたい、というような発想も期待します。

堀部 俳句の季語の「山笑う」のように、文学的な表現や詩的に表現することもよいですし、笑いの本質であるユーモアや皮肉な提案もあるとよいと思います。その人なりの、笑うとは何かを見せてほしいです。

八田 僕自身、笑いは生きるためのビタミン剤だと思っているので、私たち関西人としては、うってつけの考えが広がるテーマです(笑)。多様な考えを示してほしいと思います。

青木 笑いにはこんなにもいろいろな種類があつて多様だということですよ。ニコッと笑うのもあれば、微笑んだり、爆笑したり、ニヒルな笑みなどもありますね。それを職業にして、極めようとしている人も大勢いる。このテーマではまず、いろいろな笑いの中でどんなものがあるのかをよく見回して考えてほしいです。その中で、その笑うことを深く考察して、家というものを重ね合わせてみる。「笑う家」というのは、家が笑っていることにも、そこに住む人が笑えるような家にも、両方の意味に取れますが、どちらかに限定しないで考えてもらいたいと思います。面白い議論が起きる提案を期待しています。

(2023年4月12日大和ハウス工業東京本社にて。文責：本誌編集部)